
申し訳ありませんでしたー！ 明久様！

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

申し訳ありませんでしたー！ 明久様！

【Nコード】

N7504Y

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

この小説は所々で吉井明久君を怒りの暴走状態にしてみようという小説です。注意ですがあくまで作者の独断と偏見で作られています。それでも良いという方はどうぞ。

ラブレター事件（前書き）

反省はしている。だが、後悔はしない。

ラブレター事件

皆さん、こんにちは。吉井明久です。僕が誰かは市町村や原作を見てね。おっと、メタ発言は禁止だった。

さて、僕は今人生最大のピンチに陥っています。何故かって？ それは……

『殺せえーーーーー！！！！』

FFF団に追われているからです。次に何故追われているのか理由を述べましょう。

僕が朝、先生に貶されながらも雑用をやっていた ↓ 下駄箱にラブレター ↓ 雄二がFクラス全員にちくる ↓ 全員暴徒と化して僕を殺そうとする ↓ 僕、逃げる。みんな、追う。
以上。

ちなみにFFF団はもてる男に嫉妬する下心集団と思えばOKです。みんなはそんな卑しい人間にならないようにね。かく言う僕もFFF団の一員なんだけど、FFF団にとって裏切りや同士討ちは日常茶飯事なので気にしないでね。

『ぎゃあーーーーー！！！！』

おっと、会話しているのと同時に僕はFFF団を倒してしまったようです。でも、彼らの生命力はゴキブリ並なのですぐに復活するだろう。だから僕は少し身を隠そう。僕は隠れるところが多い屋上に向かった。

だが、そこには雄二と姫路さんがいました。姫路さんは大変焦っているようだけど、僕は今得意げな表情で満足顔の雄二が心底憎い。考えてみれば今まで雄二のせいで散々な目に遭ってきた。今日のこともそうだけど、学期始めに起こした試召戦争のときも雄二のせいで生け贄というポジションにされてしまったし、みんなから役立たずの雑魚という烙印も押されてしまった。あげく、独身の女性教師船越先生とゴールインしかけたし、Aクラス戦の時に捨て駒扱い。

おかげで学年全員からバカの代名詞、吉井明久って言われるようになってしまった。それに一年の時だって……！
思い出したらきりが無い。沸々と怒りが滾るのが分かる。雄二……
ここで余りにもふざけた発言するようなら僕は君を許さない。だから慎重に言葉を選べ、雄二……。

「俺はお前の幸せが大ッ嫌いなんだ!!」

ブッン

雄二 side

予想した通り屋上に来た明久を俺は弄り倒して、そろそろこの騒動も終わらせるかと明久が持っている手紙を取ろうと思ったのだが、明久の様子がおかしい。急に静かになり、顔も俯かせたまま微動だにしくなっていた。なんだ、やり過ぎたか？ 隣の姫路もさすがに心配になったらしく目に見えるように焦り始めた。

「おい、明久……？」

いつまでたつても何の動きを見せようとはしない明久に俺もさすがに不安になり、近づいて肩をたたいて様子を見ようとした。

ガッ！

瞬間、手を掴まれた。俺は驚いて離れようとするがビクともしない。明久にこんな力が！？ 急なことで冷静な判断が出来ないでいる。

「ゆうじい……」

明久から地の底をはうような声が聞こえた。くそっ！ 油断させて殺る算段だったのか。だが接近戦なら俺の方が有利……！

「きみは、どうして、ぼくのしあわせが、きらいなのかなあ？」

明久は俯いていた顔をあげて、しゃべり出す。その瞬間、俺は初めて明久に恐怖した。

瞳のハイライトが消えていて、首は右に45度傾き、口は笑っていた。その表情にさっきの声。しかも声色が明久の声ではなく、別の女性の、ヤンデレ系というのか、そんな声色になっていた。捕まれた腕も尋常ではない力で捕まれている。

正直に言おう。怖い、マジ怖い。翔子なんて目じゃないぐらいに怖い。

「ぼくはしあわせになったらいけないのかな？ てがみをゆつくりみることもいけないのかな？ きみのしあわせのおもちやにされるだけなのかな？」

「い、いえ！ 滅相もございません！ あなたはぜひとも幸せになるべきです！」

「そうなんだ。でも、さっきゆうじはぼくのしあわせはだいっきらいだっていったよね？ ねえ？」

「い、いえ。それは間違えて言ってしまいました……！」

「嘘だツー！」

ヒイ！！ 明久がレナ化しやがった！！

俺は背筋から大量の冷や汗が流れてきた。ひぐらしの最初の主役の男子は今の俺の気持ちと同じなんだろうな。

あ、あれっ？ 明久の背中にある鉈のようなものって……あれって……

「あ、明久。いや、明久様？ その後ろにある武器はなんでしょうか？」

「これ？ これはねえ、ゆうじとあそぶためのどうぐだよ？ あっ、あんして。てがみはきみのようばうどおりすててあげるからね？」

「い、いや！ そんな私めの為に貴重なお時間を割いては時間の無駄ですし、私の要望はわざわざかなえさせて貰うようなものでもありませんから……」

「だいじょうぶだよ？ ゆうじ……」

明久の今の笑顔が怖い。後ろに絶望的な闇が広がっているのがわかる。今にして俺は分かった。

明久を怒らせてはならないと。

最高に子供っぽい笑顔を浮かべて明久は言い放つ。

「あそぼ♪」

A
A
A
A
A
A
A
A
A
—
—
—
—
—
…

そこで俺の意識は途絶えた。

後の惨状を目撃者である姫路瑞希はガタガタと震えながらこう答えた。

「いめんざい いめんざい いめんざい いめんざい いめんざい...」

...

ラブレター事件（後書き）

ネタややって欲しい場面の要望がありましたらどうぞ。

覗き疑惑の濡れ衣 パターン？（前書き）

投稿した一話目だけでPVが3000越えをしました。こうして見ると、主人公が理不尽な目に遭うことが嫌な人って、それなりにいるってことが分かりました。

今回の覗き疑惑に関しては意見がそれなりにあったために、それぞれで場面を用意することにしました。前回とは打って変わって、結構真面目な文章になっています。

それでは、どうぞ。

覗き疑惑の濡れ衣 パターン？

久しぶりの人も、初めましての人もこんにちは、吉井明久だよ。文月学園に通う二年生さ。さて、今僕は非常に混乱している。

なぜかって？ 女子の更衣の盗撮、盗聴疑惑の濡れ衣を課せられているからさ。

説明が足りないと思うので簡潔に説明しよう。学校行事の一つで学力強化合宿をすることになり、二学年は全員合宿中の宿泊予定地に泊まることになった。その初日、脅迫されていた僕は心強い親友から脅迫犯の情報を教えて貰っていたら、女子が大量に現れて僕たちが覗きの犯人だと言ってきたのだ。

正直に言おう。僕はやっていない。あ、間違えた。僕たちはやっていない。アリバイもあるし、何より僕は脅迫されていて異性に対して積極的になることができない。そうこうしている内に、僕は石畳の上に正座させられて石の板（？）みたいなものを積まれていく。違うと言っているのに美波は聞いてくれない。

つか何で僕たちだとそう確信して迫ってくるのかな……先生に相談するとか、他に方法があるはずなのに。大体犯罪だよ？ 犯罪。盗聴、盗撮は立派な犯罪だから先生を呼ぶべきだし、ちゃんとした対応を取るべきだよ？ もし僕たちじゃなくて別の人が撮影していてそれを元に脅迫されたらどうするつもりなのさ。絶対そんなこと考えていない。ていうよりも拷問も犯罪だったような覚えが……！ 考えてみたら腹が立ってきた。もしかして憂さ晴らし？ 私たちは被害者だから何をしても許されるんだって言うのかな？ もしそうなら心底腹が立つ。今まで女子で口くなく目にしに遭っていない。関節技然り、拷問然り、罵詈雑言然り……！ 思い出しただけで目の前が真っ赤になる。僕が何をした！？ 僕が君たちを著しく傷つけるマネでもしたのか！？ 今回だって勝手な決めつけで自分たちのルールで僕たちを勝手に裁いているだけじゃないか！？ こんな奴

らに……こんな奴らに！

「ちゃんと反省しなさい！ アキ！！」

ブツン

美波 side

まったく！ アキの奴、どうしてこんなにスケベなのかしら！？

私は目の前にいるアキこと吉井明久にお仕置きをしながら考えていた。合宿場に向かっているときの電車の中でもアキは私の心境なんて知る由もなくのほほんと答えていたし、瑞希から弁当を貰って幸せそうに眠りだして！ あげくこの覗き！ 本当に信じられない！

瑞希も瑞希よ！ 一緒にお仕置きしようと言ったら「私はあの明久君、いえ“明久様”を呼び覚ましたくありません……」と青い顔で言って参加しなかったし。瑞希にトラウマを残すなんてどれだけ女心が分かってないの！？ 今日という今日は徹底的に体に教え込んで……！

ブツン！

と、唐突に縄が引きちぎれる音がした。えっ？ 何？ 私が驚いているとアキが両手で石板を押しつけて、石畳から抜け出す。私は思わず抵抗に驚いて後ずさる。

「ちよつと、何しているの！？ その覗き犯！！」

女子の一人がアキを批難した後、他の女子も批難を始める。アキは

手首を動かしながら何も喋らない。私はまだお仕置きの続きだとばかりにアキに関節技を仕掛けようとする。

「黙れ」

ピタッ!!

アキが一言発しただけなのに、私たちは何も喋れず、動けなくなつた。むしろ、動けないといった表現が正しいと思う。それぐらいアキから発せられる雰囲気が高く、苦しい。その中でアキは手を額に当てて、やれやれといった感じてため息を吐く。

「僕たちはやっていないと言っているのに、誰一人として聞こうとはしないとは……」

嘆くかのようにアキは首を振る。人を小馬鹿にしたような態度だが、その表情のせいで何も言えない。だって、怖すぎる……

目はハイライトが消えて、小馬鹿にしたような態度のくせに目と口は笑っておらず、絶対零度の目つきをしている。そのせいで誰も反論できないでいた。

「両親や先生から『話は最後まで聞きましょう』という言葉が聞かなかったのかな？ 聞かなかったのだろうね。まあ、そんなことはいいだよ。それより君たちは最初に先生に相談するって方法を思い浮かなかったのかい？ こんな僕でも思いつく方法だよ、僕より学力が上の君たちが思いつかないというのも変な話だね」

珍しく饒舌なアキ。こんなにも喋れるとはおもはなかった。

「まあ、それもどうでもいい。今なら僕は自分を自制することが出来る。そちらも三分ほど上げよう。その時間帯に自分たちの過ちを悔い改めるといふのならこのまま穏便に終わらせよう。では、三分だ」

完全に場を空気を掌握したアキ。でも、私は気に入らなかった。お

仕置きをしているはずなのに、いつの間にかアキに説教されている
かのようなだった。だから私は反抗した。

「ふざけないで!!」

今にして思えば、

「私たちに非はないわよ!」

私はなんて馬鹿なことを言ったのだろうかと、

「悪いのはアキ……」

心の底から後悔した。

「あんた達が全部悪いのよ!!」

雄二 side

突如、明久の豹変により中断された拷問。明久の豹変を見て、俺は
自分の過ちを思い出した。そして今の現状。俺は理解した。俺の時
とは種類は違うが、

“明久様”が降臨したと……

島田の発言を受けて女子達はまた騒ぎ出すが、翔子からのアイアン
クローが来ない。見ると翔子はガタガタと震えて明久を凝視してい
た。そして俺に視線を向けて問いかける。

「雄二……あれはなに?」

「……さあな。最後の審判者じゃねえのか？」

俺は震える翔子から離れてムツツリー二を拾い、秀吉を連れて部屋を出ようとする。幸い女子は明久様に注目しており俺たちに気づいていない。翔子には悪いが、今回ばかりは自業自得だ。その罰は受けてもらう。

「……君を信じた僕がバカだった」

出ようとす途中、後ろから明久様の声がした。絶対零度の声。あれは完全に愛想を尽かせたって感じの声だな。島田が絶望的な表情をしているのが目に浮かぶ。だがこちらにも自業自得だ。

「さよなら、島田さん」

明久様の声を最後に部屋を出て、ドアを閉める。すると、女子の悲鳴が上がった。俺と秀吉、ムツツリー二は聞こえなかったことにして教師の所へ今回のことを説明しに行った。

その翌日、明久は元に戻っていたが島田に対してのみ赤の他人のよきな態度をとり続けていた。

覗き疑惑の濡れ衣 パターン？（後書き）

どうでしたか？

ご感想、ご意見、ご要望お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7504y/>

申し訳ありませんでしたー！ 明久様！

2011年11月27日23時00分発行